

アクターネットワーク理論から見た人工主体

池原 優斗 (Yuto Ikehara)

北海道大学大学院文学院

本発表では、アクターネットワーク理論から見た人工主体を論じる。なお、本発表における人工主体の定義は、人間がそれをある種の主体として経験することを誘発するような人工物とする。したがって、人工知能 (AI) に限らず、AI が使われていないロボットや人工生命も、人間がそれをある種の主体として経験することを誘発するのであれば、人工主体に該当する。以下では、人工主体の例をいくつか挙げる。日本マイクロソフトによって開発された「りんな」は AI を用いたチャットボットでありながら、LINE を用いて感情豊かな会話を行うことができる。こうした特徴を持つ「りんな」は人工主体の一つの例である。一方で、人工主体は感情に焦点を当てて開発された AI を用いた人工物に限らない。日本において問題となりサービスを一時停止した画像生成 AI サービスの「mimic」も人工主体の一つである [高木 2022]。更に、衝突防止機能や自動運転機能を持つ自動車、配膳ロボットも人工主体と言えるだろう。

人工主体が関係する問題の整理や分析が困難になる要因の一つとして、人工主体にエージェンシーがあるのかがはっきりしないことが挙げられる。人間にはエージェンシーが存在する。一方で、人工主体ではない人工物は人間が思うままに利用されるのであるから、エージェンシーは存在しない。ただ、人工物でありながら、自らの意志を持っているかのように感じられる人工主体は、エージェンシーを持たない人工物であると分類することが難しい。

人工主体の問題を整理し分析するにあたって、アクターネットワーク理論 (ANT) は有効な理論的道具となるのではないだろうか。ANT はミシェル・カロン、ブルーノ・ラトゥールといった研究者によって発展してきた理論である。ANT は、簡潔に述べればアクターによって作られるネットワークを分析していく理論であるが、人間だけでなく、生物やモノである非人間もアクターとして捉える。ANT は人間と非人間を対称的に扱うのである。したがって、ANT の分析対象は、人間と非人間が含まれるアクターが関係し合っているネットワークとなる。ANT においてエージェンシーは、人間および非人間であるアクターの中にあるというよりも、アクターが織りなす布置から生まれてくる [青山 2008 : 177]。以上を踏まえれば、人工主体は人間やエージェンシーを感じない人工物と同じくアクターであり、そのエージェンシーは人工主体を含むアクターの布置から生じることとなる。ANT の持つ二つの特徴——人間と非人間を対照的に扱うこと、そして、アクターの布置の中からエージェンシーが生まれてくること——は「人工主体にエージェンシーがあるのかがはっきりしない」という問題設定の基盤を問い直す形で、人工主体が関わる問題を整理し分析することを可能にするのである。

人工主体について ANT に基づいて捉える際、具体的な問題に対してどのように応

用すればよいのかが分からないという問題が出てくる可能性がある。これは、そもそも ANT はどのように具体的な問題を解決するための議論に結びつけられるのかという問題をはらんでおり、すぐに答えを出すことはできない。しかし、ケータイ的な情報環境における「批判」を ANT によって考察した土橋 [2015] は、この問題を考えるための視座を提供している。土橋 [2015 : 19-22] は、可動的かつ可変的なケータイが常にそばにある情報環境を、デスクトップパソコンのような固定的な空間に設置されるメディアによる情報環境と対置する。そして、アドホックなニーズに柔軟に応じるため利用者の生活スタイルや価値観と摩擦を起こさずに利用者の文脈に適合するケータイを、人間と対峙する固定的メディアと異なり、人間と協働するメディアであるとする [土橋 2015 : 21-2]。ANT を用いて人間とケータイの協働を捉えれば、人間とケータイはハイブリッド・コレクティブであり、エージェンシーは人間とケータイと空間の関係的な布置連関から、関係的な効果として立ち上がってくるのだとする [土橋 2015 : 22-4]。ただ、土橋はケータイとの関係が協働であったとしても、ケータイ的な情報環境への批判的な構えを持ちづける必要があるとする [土橋 2015 : 31]。しかし、ユビキタス化とアプリケーション化によって特徴付けられるケータイ的な情報環境においては、技術に対する批判的構えを持つための距離が存在せず、また、その都度異なるエージェンシーが立ち現れてくるため、一貫した論理によって批判するための根拠が存在しない [土橋 2015 : 30-1]。土橋 [2015 : 32-3] は批判のための「距離」と「根拠」の不在に対して、外部ではなく、内部から目の前にあるケータイをめぐる布置連関に思考や実践を「付加」し、その布置連関を組み替えていくような批判のあり方を提案している。

批判のための「距離」と「根拠」の不在という問題は、正にケータイ（スマートフォン）やノートパソコンのアプリケーションによって現れ、また、配膳ロボット、自動車というようにユビキタス的に存在する人工主体にも共通するものだろう。土橋 [2015] の提案する、内部から布置連関を組み替えていく批判のあり方は、そうした批判の具体的な思想と実践がどれほどまで効果を持ちうるのか、具体的実践を通してさらに検討する必要がある。しかし、内部から布置連関を組み替えることによる批判という発想を頭に入れておくことは、ANT の記述的分析を人工主体の具体的問題に応用するための一つの契機を提供するのではないだろうか。

【参考文献】

- 高木克聡 2022 「イラスト作画 AI、作家の敵か味方か 画風学習し新たな絵 盗用を恐れ炎上」『産経新聞』9月13日 <https://www.sankei.com/article/20220913-64SABJB6PBPLPFPPRKNKD2GJ64/> 2022年10月9日閲覧.
- 青山征彦 2008 「アクターネットワーク理論が可視/不可視にするもの：エージェンシーをめぐる」『駿河台大学論叢』35: 175-185.
- 土橋臣吾 2015 「移動するモノ、設計される経験：ケータイの可動性と可変性をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』87: 17-35.